

むつ・下北 私たちのまちづくりフォーラム

第1回テーマ 「これからのまちづくり どうなる？どうする？私たちのむつ」

開催報告書

日時：平成28年4月16日 14:00～17:00

場所：むつ来さまい館 イベントホールB

後援：むつ市 東北経済産業局

協賛：中小企業基盤整備機構

スケジュール

14:00 開会挨拶 田名部まちづくり株式会社代表取締役 濱崎正明

14:05 基調講演 「むつ市の考えるまちづくり」 宮下宗一郎市長

14:40 基調講演 「国の考えるまちづくり」 国土交通省都市局
まちづくり推進課都市開発金融支援室光安達也室長

15:15 休憩

15:25 パネルディスカッション

コーディネーター：今井晴彦氏（株式会社サンプランナーズ代表）

パネリスト：宮下市長

光安室長

手塚貴晴氏（建築家 手塚建築研究所代表）

長岡俊成氏（曹洞宗円祥山大安寺副住職イカす大畑

カダル団代表）

久保里砂子氏（街の元気づくりコーディネーター）

コメンテーター：小林浩志氏（写真家 建築物を主とする街の造形）

濱崎正明代表取締役

参加者：約170名（うち高校生23名）

アンケート回収：113通（回収率66%）

ATVにて当日夕方のニュースで放送

東奥日報、デーリー東北で記事掲載

内 容 報 告

①基調講演 「むつ市の考えるまちづくり」 宮下市長

1. 事例：アメリカ・デトロイト市の現状
かつては自動車産業で全米で最も栄えた町の一つ。
現在はひどく廃れてしまっている。なぜか→公費負担増加等が原因
2. むつ市の財政の現状について
非常に厳しい状況 - 歳出 329 億
自主財源比率 25.7% 将来負担率 198.3%
実質公債費比率 17.3% 財政指数 0.38%
公共施設維持費 年間 23.3 億 → 今後更新しなければならない施設多数。
今後 40 年間で公共施設送料を 43%縮減する必要あり。
3. むつ市の現状
産業構造 サービス業が 7 割超
人口構造 現在は「釣鐘型」 将来は生産人口激減していく。
(近々 6 万人切る。年当り 1,000 人減)
4. これらの問題の解決策→コンパクトシティ
 - コンパクトシティとは
 - ・ 持続可能な都市経営 (都市機能の集約)
 - ・ 生活環境・子育て環境の維持・向上
 - ・ 地球環境 CO₂ 5%減目標 (公共施設に関する事柄での目標設置)
 - ・ 防災の向上
 - どのように進めていくか
都市計画による誘導。
 - ・ 今まで
従来都市計画で誘導しながら街づくり推進
問題点：白地エリア→無制限なまちの広がりを促進させていた
 - ・ 今後は
特定用途制限地域を指定 (白地エリアの制限) し、外延化を防ぐ。立地適正化計画により、住居地域・商業地域をコンパクトに → コアをつくる。
さらにコアな部分を作って賑わいを創設→まちづくり会社と協力し推進。
 - 大切なこと
 - 1 極集中にしない。それぞれの地域の文化・伝統を守っていかなければむつ市の価値がなくなる。

「まち」を残すためにもコンパクトシティが求められている。

- **最後に**

アゲハの夜景は都市のカタチそのもの。拡大すればアゲハが無くなり、固まればアゲハが羽ばたく。

何十年、何百年続く「まち」を皆と造っていきたい。

②基調講演 「国の考えるまちづくり」 光安室長

国の業務の中心：まちづくりの制度の検討と支援

1. まちづくりを取り巻く現状

- 人口：全国同じで人口減少（生産人口、幼年人口減少）進む。
地方都市ほど大きい状況。将来 6 割以上のところが現在の半分の人口となり、2 割には人が済まなくなる可能性大。
労働人口の減少→生産減
人口減少→サービス施設の立地減少→サービス提供できなくなる。
- 財政：小規模のところほど自主財源減少→今後、より悪化が懸念される。
収入減で発行している公債増。
公共施設の維持をどうしていくかが課題。
人口密度が薄くなると行政コストが増加する。
- 不動産：地価の問題。人口減少→地価減少。
自治体等の所有する不動産の活用が重要となってくる。
空き家増加も問題となっている。（全国で 320 万戸ほど）

2. コンパクトシティの推進

人口減少・高齢化 → まちの拡散 → 公共サービス問題。

→ コンパクトシティにより、資産価値の維持、公共サービスの維持を。

多極ネットワーク型コンパクトシティの推進。

いくつかの核を作り、それを公共交通等で結ぶ。

コンパクトシティについて

- ・すべての人口の集約ではない。
→ 例：農業従事者は今までどおり郊外で。
- ・強制的ではない。
→ インセンティブ（有利になる方策）を与えながら時間をかけて誘導しながら進めていく。

コンパクトシティ推進に向けて

- ・立地適正化計画の立案推進（各自治体で ひとつ市でも策定を進めている）

- ・コンパクトシティ形成支援チームの設置（国 H.27.3.17.）
- ・モデル都市の形成を進めている（国で支援策を講じ、それを実施することで、こういう効果があるということを見せるため）

3. 公民連携（PPP）・公的不動産（PRE）の活用によるまちづくり

● 公民連携

- 行政も人手不足化する→サービス提供が難しくなる→民間業者との連携が重要となる。（民間ノウハウを利用してカバー）
また、地域金融機関を巻き込むことも重要。（三者の連携）
現状は、自治体の70%程は連携状態にない、情報提供していない。（金融機関と）
- 国交省では、三者の連携基盤の形成のため、モデル的なものを作り協議し、ガイドラインを取りまとめて提供していく。今年度から三者の場の形成を支援していく。

● 公的不動産の活用

- 「まちづくりのための公的不動産有効活用ガイドライン」を作成し、自治体に普及している。

4. リノベーション・エリアマネジメントの推進

今まで → 再開発型（一つにまとめて大きなビルにして・・・）

今後 → 遊休不動産を一つ一つうまく再生して賑わいを。

（ひとつうまくいくと連鎖が起こっていくのでは、という考え）

作ってからテナントを求め、10年スパンで回収という従来型ではなく、

①テナントを決める ②賃料を決める ③改修費決める ④3～5年で回収
というスキームが成功の鍵だと言われている。

5. 民都機構によるまちづくり支援

まちづくり会社には民都機構を利用してほしい。

特に、まち再生出資制度の活用を勧めたい。

まち再生出資制度・事業を行う際の、自己資金部分を、出資という形で50%を限度として提供する制度。

③パネルディスカッション

(コーディネーター、各パネリスト、各コメンテーターの簡単な自己紹介 省)

今井：今後の更なる人口減少、高齢化、財政悪化という問題の増加に対する解決策がコンパクトシティだという話。コンパクトシティに対する感想を。

まずは地元の方、長岡さんから。

長岡：必要性はあるだろう。1極集中ではないということで認識を新たにもした。下北半島には膨大な集落があり、これをどう集約するかが問題。地域への愛着強く、どうやっていくかが難しいのではないだろうか。

空家増加への危機感もある。

コンパクトシティ＝アウガという印象あり。なぜアウガが失敗したかの検証必要。そのうえで進めていくというコンセンサスを取っていくのは気が遠くなる。

スポンジシティ（空家を空店舗や他の用途へ変えていく）という考え方があり、既存施設をどう更新していくか、ということを考えていく必要あり。長期的にはコンパクトシティだろうが、短期的にこのような考え方を取り入れながら市民が参画しやすいステップを作ることが大事。

今井：東ドイツでは急激なコンパクトシティ化を進めたときに、人・地域の文化、心ということが大きな問題として浮かび上がったということがあった。

非常に大切な点を最初からあげてもらった。次に久保さん。

久保：コンパクトシティは役割分担。大事な部分は中心にあり、それを周辺がどう生かしていくか、それぞれの役割があるのでは。

市長の話の中で、都市機能をどこに持っていくのか、すぐにはできないが明確であったのは素晴らしい。ただ、民間の動きで変わっていく。民間施設で、ちょっとしたものでもできるとそこに人は集まり、街は変わっていく。まちゼミもコンパクトシティに関わっている。

今井：地元の方ではないが、グローバルに活躍されている手塚さん、コンパクトシティという考え方についてどう捉えているか。

手塚：市長の話したことは一番正しい方向。市長という立場の人からこのようなプロの意見が出るのは画期的。

重要なのは小さくするだけではなく、クオリティを高めること。

アウトドアライフを勧める。北欧では皆街に出ている。外に人が出歩ける街は、人の集まる街。道との関係、意識改革が必要。

フランスでは冬でもオープンカフェに人が集まる。

アラスカ・フェアバンクスでは、冬に太いタイヤを履かせた自転車で街を走っている。こちらでも走れるのでは？

今井：コンパクトシティに反対の人はいないが、文化の問題、クオリティの問題など、課題も出た。

市長、これからの取り組みの抱負を。

市長：フェアバンクスの自転車の話や冬のオープンカフェの話は、日本に足りないものの集約という気がする。我々には、突き抜けてやっていこう、楽しんでやろうという発想が必要。そうしてはじめていけば、賑わい、活性化につながると思うし、それを応援していくことが大事。

まちづくりという観点でコンパクトシティの話をした。

ただ、コンパクトシティは数ある政策の一つにすぎない。「まち ひと 仕事」のうちの1/3のこと。

短期では仕事をどうしていくか。次にまちをどうしていくか、そして人をどうするか。長期的には人が大事。

デトロイトは手塚さんによると今立ち直っているようだ。立ち直った理由は、デトロイト出身の大金持ちの人が戻ってきて都市開発をやったからとのこと。人づくり、教育も非常に大事なことだということ。

コンパクトシティは大切だが一つのツールに過ぎない。

やり方については時間がかかる。問題の解決方法としては、重点投資、という話をした。そうすればするほどそのエリアに住む人の得になる。少しずつ集約ができてくる。ぶれずにやり続けて、20年後、30年後に結果が出る。それがコンパクトシティ化。

もう一方で大事なものは、文化的多様性を失うことがあってはならない、ということ。むつ市も地方。地方が地方を大事にしなければならない。

今井：時間がかかる。総合的にやらなければいけない、という話。

全国での事例の紹介あれば。

光安：立地適正化計画は、美濃市と熊本市の2市のみが現在策定している。

コンパクトシティで先進的なのは富山市。ずっと以前からやっている。

公共交通を軸にまちづくりを行ない（公共交通を使い易くする取り組み）、まちなか居住を推進した（中心市街地に家を建てる人に補助を出すなど）。

コンパクトシティ化することが目的なのではなく、ツールの一つ。その取り組みをどうやるかは、富山市のやっているような、工夫をしながら進めていくことが重要。

今井：コンパクトシティを目指しての取り組みをしていかなければいけないが、すぐにはできない。ネットワークをどうするか。むつ下北では自家用車が主で公共交通になかなか乗らない。

まずどうやって行くか。

市長：まちゼミの取り組みや、今年の十市大祭、大畑の薬研開湯400年祭など、

イベント盛り上がっている。

エリアでストーリーをつけながらやっていくことが集約のきっかけとなるし、長期的なまちづくりの上で重要。

今井：まちゼミはどうしていく？

久保：むつに来てすぐにはできなかった。実現できたのは今年。この街でここにいる人たちと何ができるか、その中で関心を持った人と関心を持ったことをその人とちょっとやってみよう、というその1歩。小さな成功の積み重ねだと思う。小さな、皆が思ったことをやってみる。それを繰り返し、いろいろやっていけばよいと思っている。

今井：人づくりですね。

空き家の問題、スポンジシティの話、クオリティの問題が絡み合っている気がした。

魅力がないと住んでくれない。その所を長岡さんから。

長岡：「まちなか」に期待感を持っているが、田名部に行って楽しい場所があるかを考えてみるべき。

大畑に戻ってきて一番苦しかったのがスタバがなかったこと。ふらっと行って、好きな話ができる場所がないことが苦しかった。

出かけたくなるようなまちづくりに取り組むべき。

まず、冬でもどんな寒くてもあそこへ連れてってくれと高齢者が言うようなまちづくりが必要。まちの求心力になるものは何かをもって考えなければならない。

人は文化的なものに魅力を感じて外へ出る。魅力あるまちづくりを考えなければならない。そのうえで公共交通が必要なら、どういう人に必要なのか等分析したうえで検討するのがよいのではないか。

今井：鳥取の人は、スタバはないけど砂場はあると言ったとか。

話したい人がいっぱいいるが、まずは市長から。

市長：空き家は現在16%。かなりあるのが現状。

魅力あるまちがあれば外に出るのか、今のまちを魅力あるまちとして外に出てもらうか、だが、現状で言えば後者。楽しいということは人の感性の問題。楽しいと思うことを考えて作っていく、感性を出していくことが重要（ソフト事業部分として）。

論点は、まちはすぐには変わらないが、その間何をすべきか。

ハード事業としては、よしの保育園のように、顔になるような施設を作ること。そこに人は集まるようになる。そういうコアになるエリアを作っていく、それが増えていくことで、少しずつ外に出てみようというまちになっていく。十和田はこういうことをうまくやっている。こういうことを少しずつ考えて

いき、コンパクトシティのエリアの中で少しずつやっていけば、変わっていくと考えている。

手塚：車の話は重要。

中心市街地が衰退した最大の原因は、路上駐車を禁止にしたことという説有り。

長岡氏の言った、高齢者が街に連れてってくれと言ったとき、バスでは連れていけない。車で行くことになるが、停めたいところに止められるのは大事なこと。いい街は路上駐車させている。

神楽坂で試験的に動かないパーキングメーターを道路脇につけ、路上駐車できるようにしたら、飛躍的に集客力が上がった。路上駐車が出来るまちを創ることがよいのではないか。

今井：面白い話。実験してみるかどうか、市長に考えてもらって…

手塚：やってみたらいいのでは？

市長：道路については（自分ではなく）警察がOKしたらできるのでは。

手塚：警察に言えるのは市長だけだから。

今井：なかなか難しいところもあるようです。

質疑応答

今井：今日は高校生も来ている、難しかったか、またはその程度かと思われたか…
来られた会場の方々の意見、質問等を受け付けたい。演説なし。どなたか…

質①：市長にコンパクトシティの展望について聞きたい。短期的には仕事が大事といわれた。雇用を作っていくことについてどう考えているか。

市長：仕事を増やすについて3つの軸を考えている。

1次産業については高付加価値化、6次産業化して、より高く売り、所得を伸ばす。所得増により、子供が帰ってこられるようになる。

2次産業については、企業誘致。国や立地企業との関係を深める。技術力の向上含めて。

3次産業については、創業支援をやっている。仕事をしたい人の準備に融資等の情報や空店舗の紹介などに取組んでいる。

今井：他にありますか？

質②：2点ほど、市長に。

生徒に教えるときに、やりたいことをやれるようにと指導しているが、これについて。

路上駐車の話で、三沢では市役所前は路上駐車できるが、三沢はつまらないからと言って出ていく人がいる、これについて。

今井：まず市長から。

市長：児童、生徒に必ず言っていることは、自分たちが実現したい世の中に、自分たちが変える、という気持ちを持つ、ということ。

小中学生は、むつ市はこうしたほうがいい、とよく意見を言う。しかし、そういう「してほしい」という考えではなく、自分たちで努力して勝ち取る、そういう気持ちで世に出てほしい。

ポートエンジェルスの子供たちは、大人に話を聞き、こうなってほしい、とのためにはこうする、という考えを持つ。(日米での考え方、文化の違いか)子供に対しては、自分たちを変えろ、というメッセージを送ること。

それから、まちを楽しめないのは感性の問題。楽しもうという気持ちが大事。大畑のイベントも同じ。ものにしていくことに楽しみを見出すこと、作っていくことだ。これを先生も楽しんでもらいたい。

今井：自分で地域での宝物を見つけないと、ということでしょうか。
手塚さん？

手塚：いえ、市長に頑張ってもらっただけ。

今井：他に？

質③：久保さんがどういう人か、と参加した。

まちゼミ、むつ市に住んでいてはできない発想。下北半島食べるもの通信も素晴らしい。これからの健康に気を付けていいところを発信してほしい。主催者も2回以降も久保さんを入れてほしい。

久保さん、むつは好きですか？

久保：大好きです。むつに来て、青森県は津軽、南部ではなく、津軽、南部、下北で語るべきと思った。県内の人に知られていないことが多い。自分がここをもっと好きになり、楽しく暮らして色んないいものを見つけ伝えていければよい。まだまだできることいっぱいあると思っている。

今井：他に、女性の方で。

質④：シンポジウムは聞かないつもりで、先に、人が歩かない街ではまちづくりの意味がない、という感想を書いた。暮らしが息づくまちづくりがここで示せるかが知りたくて参加したが、十分手ごたえがあった。ありがとう。

今井：そのとおりで、人が歩かない街は寂しい。皆さんに歩いてもらうようにしましょう。

時間もなくなってきたので、最後に高校生に。話して帰ろうという人は？君はどう？

生徒：では、思ったことを。

コンパクトシティにした場合、高校の校舎はどうなるのか。

部活とかはうまくできるのか。他の市町村への遠征費はどうなるのか。

こういうことを思った。

市長：高校生らしい、いい質問。

学校、校舎の問題は、大事な論点。学校統合がなされると、場所をどうするかという問題も出るが、今現在そういう考えはない。教育関連のところと今後話し合っていく。

部活、遠征問題も論点。部活としてやるのか、スポーツクラブとしてやるのか、地域で支えていく仕組みを作るのか、議論を重ねている。

これもまだ答えはない。費用の点については、バス料金が高額になったこともあり、国交省にお願いしているところでもある。

考えているけど、答えは今はない。しかし、コンパクトシティにおける重要な論点であり、しっかり考え、解決していきたい。

そのうち、高校生からの意見が参考になること增多ると思う。

今井：有難うございました。質疑の方はこれで終了とし、最後にパネリストから一言ずつお願いします。

久保：内容が濃いフォーラムだった。行政の考えているまちづくりの方法を丁寧に説明してもらった。だが、本当に考えていかなければならないのは民間の私たちだと思っている。

行政は長いビジョンで。私たちは小さな、できることからやっていく、実現していこう、と思う。行政に頼らず、自分たちでできることをやっていく、行政の考えていることを頭の隅におき、やっていければ、と思う。

長岡：都市のために人の営みがあるわけではない。都市は人の営みのためにあることを忘れてはいけないし、自分たちの世代さえ生きながらえられればいいのではなく、子孫たちがこの町で生きていくことができるのか、という視点を持って、上の世代の方たちと、どう渡していくかを真剣に考えていくべき。今日は第1回目のフォーラムで、この後テーマを絞ったのフォーラムをやっていく。自分たちの意見を言える場があることを皆に伝えていただいて、次回以降も双方向の意見、ビジョンを示しあう場にしていければ、と思う。手ごたえあったと思う。

手塚：デトロイトの話の関連で。

ピッツバーグの再生のときに言われたこと。人が減るといいことある。何かというと、大きな土地が使え、大きな家に住める。それが実は豊かだ、ということ。そのためには皆で掃除をしていかなければならない。

デトロイトの再生をしたダン・ギルバートが言ったこと。「Do right thing」- 正しいことだけをしなさい- と言った。

要は、「本当に正しいことをしているの？」と皆に言い続けるといいまちができる。

それから皆に言っておきたいのは、地域再生のキーワード。100%。

氷見のまちで「氷見 100%」ということをやった。(すべて氷見のもので展覧会を行ったりし、大盛況だった)

それでどう風土を作れるか。これからやらなければならないのは、むつの風土は何なのか、を考えていくべき。

繰り返すが、言いたいことは、正しいことをやっているか、と、人が減ってもいいことはある。正しいことをやること。

風土とは何か、ということを考えてもらえるとよいと思う。

今井：光安さん、国交省の立場を離れての感想を。

光安：秋田に単身赴任で行き、3年間車のない生活をした(免許を持っていないので)。仕事でいろいろなところへ行き、楽しかったが、個人的にはどこにも行けずに楽しめず、公共交通の大切さを身に染みて感じた。男鹿半島に行くのに、バスでほぼ1日かかりで、これでは地域の魅力がなくなる。ただ、バスのほとんどは空き。少しでも皆が乗車すれば少しはサービス向上するのかもしれないと思う。

ただ、そういうことは、車がないと生活できない地方ではなかなか分らないと思う。一度1年くらい車のない生活をするとうまくわかるので、是非そういう体験をしてみしてほしい。

市長は国交省出身で、こういう場でもフランクに話している。まちづくりは行政と市民とが率直に意見交換し合って、皆でやっていくことが必要で、そうされている。

まちづくりは長い取り組み。こういう形でやっていけばとてもいいまちづくりができると思う。

まちづくりは皆がやるもので、与えられるものではない。どうしていくか考えて、それに対して行政が答えていくものだと思う。皆がやっていくという意識を持ってやっていってもらえればと思う。

今井：国交省からも応援が入った市長に。今日これが第1回目で、最後ではないが、トータルで。

市長：応援も頂き、感無量。皆さん、有難うございます。大変勉強になった。

神輿に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人、という言葉がある。選挙する人は知っているが、要は候補者がいて、それを支える後援会がいて、応援する多くの市民がいる、ということ。都市、まちを考えると、これは人々の活動の一つの舞台。長岡氏も話していたが、まちを造るために作るのではなく、まちでどういう活動をしてもらうか、どういう他の市民を共有できるかをイメージしながらまちは造らなければならない。

であれば、コンパクトシティという大きな枠での方針示して都市計画をし、モデル的に中心市街地整備をしていったとしても、そこで活躍する人がいな

ければダメ。大きな方針の中で、いかに皆さんとの対話の中でまちを造り上げていくか、が最も重要。

第1回としてのメッセージとして、みんなで一緒にむつを造っていきたい、と考えている。

今井：終わった感あるが、コメンテーターの人にも。しゃべらないと言っていたが敢えて指名します。

小林：まちづくりは人がやってくれるものではない。誰かがやってくれると思ったら進まないし、自分たちでどうしていくかを真剣に考えないと前に進まない。自分たちのまちを知るという意味で、自分たちのまちのことを絵本にしたところがある。自分たちのまちを愛するようにならないとよくなる。もう一点、時間との関係が重要。進んでいく時間の上にまちづくりは乗っている。長い時間、どういう風に変化していくか、ということ意識していないとだめだと思う。うまくいかないことが起きても長い時間の中でそれがどう変化し、どういう方向に行くのか、常に考えていないと、焦っても何もうまくいかないような気がする。

今井：有難うございます。いいコメントでした。

濱崎：角度を変えて話をさせていただく。

下北半島は、明治の初めから国策とともに生きてきた地域。常に大きな力の中で、開発と挫折の繰り返しだった。その中で、住んでいる方々にとっては、挫折の方が多く、夢を見る期間が短かったように思う。自分のような外から来て半世紀近く住んでいる者には、それがいつの間にか遺伝子のようになって沈殿しているように感じる。

まちづくりもそうだが、国の中で下北半島がいかに大切な地域なのかを前提にしてこの地域のまちづくりに取り組む。開発と挫折の中の、挫折を乗り越えて自分たちのまちを日本のまちの中で一番豊かなまちにしていくのだ、という気概が必要ではないかと思っている。

これから先、できる限り頑張っていきたいと思っているので、よろしく願いします。

今井：有難うございました。

今日は想定と違う時間の進み方の流れだったが、漸くここまで来て、これで最後として終わりとした。

本日は色々な意見が出て、色々な要因が出てきた。その話を一つ一つ考えても広がりをもって奥深い部分があった。それら一つ一つ取っても、いろんな議論ができるようなものが同時に一度に出てきたが、時間が充分なく、あまり広がらなかったところがあった。

このフォーラムで、最初に市長や国交省の方の話で、人が減って高齢化して

いくときにはまちをコンパクト化していく、つまり今と違うことになっていかなければ、今のままではダメだ、というところから始まった。

そうはいつでもまちに魅力がないと人は住まないし集まらない、といった意見が出た。こういう中で、まちの安全はどう確保するか、老人ばかりになったところはどうか、とか具体的には色々な問題を乗り越えていかないとまちは生きていけない。ぼんやりしていても生きていけない。

こういう課題を、これからあと6回くらいに分けて、少しずつ、皆と話し合い、議論していきたいと思っている。

第1回に参加いただき、皆さん有難うございました。